


 巻頭言

大学で講義をしていて思うこと

 東京農工大学 なつ夏 め目 まさ雅 ひろ裕


大学で講義をするようになって、20年以上が経った。当初はどのように説明したら・どのような資料を用いたら、学生に理解してもらえるかに腐心していたが、次第に、自らが問題意識を持って自主的に学ぶことを教えよとか、知識だけでなく、文章読解力、作成力、表現力やコミュニケーション能力を養えるような講義を工夫せよ、最近では留学やインターンシップ等大学外での活動にも単位を与えるので参加を促せ等々、教員も学生も求められることはどんどん広がってきている。

そのような大学教育の変化の一つとして、本学では2010年度から「農学基礎ゼミ」という科目が学部共通科目として開講されている。これは新入生を対象に、「大学入学までの受動的な知識の蓄積型学習方法から脱却し、自らが問題意識を持ち、自主的に勉学する方法を身につける」ことを目的としたもので、各教員がテーマを提示し、学生が興味あるものを選択して、10名以下のゼミ形式で行うもので、そのころに多くの大学で始められている。どうして大学生にそのようなことまでわざわざ教えなければならなくなってしまうのかと思うのだが。

小生は「農業は必要か?」というテーマで、2010年と11年に連続で基礎ゼミを担当し、昨年久しぶりに担当した。初年度と次年度は「踊る「食の安全」—農業から見える日本の食卓」(松永和紀 著、家の光協会)の一部を読んで、昨年度は動画「食糧生産の重要性と農業の役割」(農業工業会)を見て、各自で課題を設定し、本やWebサイトを調べてレポートに纏め、その内容をPowerPointを用いて発表し、議論するという形式で行った。初年度と次年度は農家の子女が参加しており、体験談も交えた賛否両論活発な議論があって、興味深かった。昨年度の受講生は、中高の授業や家庭での話から食の安全に興味があったとか、農業は必要だと思っていたが、なんとなくでしかなかったのといった理由であった。プレゼンテーションの技術は以前の学生より格段に向上していたが、内容はそつなく纏められており、議論も今ひとつ盛り上がり欠けた。人数が少ないので参加者のキャラクターの影響が大きいとは思いますが、醒めているとの感が否めなかった。一方、20年来担当している「植物保護学」というオムニバス形式の講義で、化学農業の功罪について歴史的背景から農業の作用機構や登録制度、監視体制までを、1回90分の講義ではあるが解説している。この講義に関しては以前も最近も、ほとんどの学生は科学的に説明をすれば理解してくれる。このような講義を行って来て思うのは、学生の農業に対する拒否反

応はずいぶん弱くなったと感じる反面、自ら強い関心を抱いて考えることがなく、与えられたものはそのまま受け入れるようになってしまって、大学生に学び方も教えなければならない時代になってしまったのだと実感する。

そのような時代の若い人に対して、私に何ができるのだろうか?

大学の講義内容を「農業」と「シラバス(授業計画)」というキーワードで検索し、site.ac.jpで絞り込むと6千件以上のウェブサイトがヒットする。内容を詳細に解析しているわけではないが、多くは農学系の専門科目や大学院の科目の一部として扱われているようで、学科や専門にかかわらず多くの学生が学ぶ教養科目として教えている講義は少ないようである。できるだけ多くの若い人に考えてもらう機会を作っていこうと思う。

農業学会では「農業について知ろう」というポータルサイトを開設している。トップページにはキーワードから調べるボタンとともに小学生、一般、先生、農業・流通業関係者という対象別のボタンを配置して、そこをクリックしていくと関連のサイトにたどり着けるようになっている。このサイトを通して、若い人や一般の人の農業に関する疑問が少しずつでも解消され、理解が深まることを期待している。また、農業学会は2016年の大会で「農業をよく知ってもらうための情報伝達」というタイトルで、日本植物防疫協会も2018年に「植物防疫をどう教えるか」というシンポジウムを開いている。植物保護関連の学会や協会が連携して、一般向けのシンポジウムなどの広報活動ができるとよいと思う。

最近ではプラスチックに関する様々な問題がマスコミのターゲットになっていて、農業に関する記事を目にする機会は減っている。また、少し前に盛んに取り上げられていた日本の食料自給率や世界の食料生産に関する議論も下火になってしまっている。一方、テレビでは料理番組やグルメ番組が流行り、食品やサプリメントの特定の成分に過度な期待をさせるようなコマーシャルが流れている。ところが、SDGsの目標の一つは「飢餓をゼロに」である。考えてみれば、ヒトは火や道具を使い始め、農耕を始めたときから、自然を壊し、資源を消費しているわけで、我々は地球に生かされているとの感謝の念を持って、食という身近な問題を考える中で、農業についての理解を深めてほしいと思う。否応無しに多くの情報が入ってくる現在、農業にかかわる者と消費者のリスク・コミュニケーションの重要性はますます高まっている。

(日本農業学会会長)